



令和6年9月19日

研修だより 35号

山名小学校研修会（講師の授業）

小笠原康晃

2 講師「椿原正和先生の授業」

5年1組（初任者のクラス）に、1時間限りの飛び入りという形で授業をしました

「誰一人取り残さない授業」の実践ということで、講師による授業をしていました。

「春のうた」の詩を扱った授業でした。

開始5分で教室の雰囲気が変わりました。

子どもたちの心を掴んだ、という表現が一番正しいと思います。

緊張感の中、子どもたちは授業を受けました。

以下がその流れです。

（1）授業の流れ（講師の先生の言動）

①発表の練習

一番初めてに

「こちらの列、起立。」

「私の名前は～です、と言いなさい」

と指示を出し、名前を言わせていました。

このとき、常に目線は、子ども。

一人一人の発言にうなづいていました。

ここで、一人一人の子どもと目を合わせているのだと感じました。

②持ち物の確認

「鉛筆を出して。」

「手で持ちます。」

「先を上に向けて」

細かく指示を出し、確認をしていきました。

鉛筆、赤鉛筆、消しゴム、定規と指示を出します。

その中で、

「赤鉛筆がない子、周りの先生、貸してあげて」

と声をかけました。

「学習用具を確実に揃えることが大切です。」

と話をしていました。

スタート地点から遅れている子はそのまま学習に参加できないことが多いです。

忘れ物指導はしっかりとするにしても、忘れた子への配慮は必要だと感じました。

③音読（音読集）

音読集にあった詩の暗唱をしていました。

全部で10行くらいの短い詩でした。

初めの4行を扱いました。

一斉に読みました。

教師の後について読みました。

その後、

「みんなの前で読んでみたい子はいますか。」

「今から、1秒だけ待ちます。読みたい子はその間に手をあげてください。」

という指示でした。

後の講演の中で、「子どもたちに緊張感を持たせ、成長をさせるための方法として扱った」ということでした。

実際にチャレンジをしたことは、先生から褒められ、周りの子からも拍手で賞賛されていました。

「緊張して、挑戦する子が他の人よりも一歩成長をします。」

と、子どもたちの前でも説明していました。

④音読（春のうた）

一年前に学習した「春のうた」を再度学習するというかたちでした。

音読というよりも、内容を深く読んでいくという内容でした。

⑤主発問「おおきなくも」のくもは「雲」か「蜘蛛」か

詩の中で「おおきなくも」という表現があります。

これは「雲」か「蜘蛛」かを考えるという内容でした。

実際に学術論文を提示して、

「学者の間でも意見が分かれています。みなさんはどちらに賛成ですか。」と、発問をしていました。

⑥意見をまとめる（主張、引用、根拠を扱う）

「まず、主張を書きます。

ノートに「私は～だと思えます」と書きます。

これを主張と言います。」

と、指示をしながら、説明をしていました。

「次に、引用を書きます。

引用はなぜそのように思ったのか。

理由となる文章をそのまま書き写します。

「そう思ったのは「」と書いてあるからです」と書きます。」

と指示をしました。

「最後に理由を書きます。

「理由は～だからです」と書きます。

この理由は難しいので、書けない子もいると思います。

また、自分の言葉で書きますから、長さもバラバラだと思います。

しかし、挑戦してみましょう」

と指示を出しました。

子どもたちはシーンとして、次々に文章を書いていた。

⑦友達と話し合い

ある程度の時間が経ったら、友達との交流が始まりました。

自由に移動して、色々な友達と交流をしていました。

⑧コース別学習で自分の考えを深める（原典コース、科学コース、五感コース）

しばらくすると、「今日は「雲」か「蜘蛛」か追究します」

「資料を配りますから、一度席に戻ってください」

と、指示がありました。

「原典コース、科学コース、五感コースの3つに分かれます。」

原典コースは、その詩の原典が書かれた資料を元に考えるコースです。

科学コースは、カエルの生態が書かれた資料を元に考えるコースです。

五感コースは、人間の五感をヒントに考えるコースです。

どのコースを選んでも自由です。

子どもたちは、一人一人コースを選んで、それぞれの資料をもらいました。

そして、自分の考えをまとめていました。

その中で、自分の意見が変わる子もいれば、変わらない子もいました。

「詩の解釈」というゴールは学級で一緒ですが、そこに辿り着くまでの過程はバラバラでした。

複線型の授業というそうです。

このような学習が、個別最適な学習や協働的な学習に繋がるそうです。

⑨「自分の納得解」を出して、授業を終わる。

「答えが変わっても、変わらなくても、どちらでも良いです。

大切なのは、自分で納得をして答えを出すことです。」

と最後に、話して授業を終わりました。

(2) 講師の先生がした授業のポイント (授業のベーシックスキル)

※①～⑤の言葉は講師の先生が例示したものです。

①丸つけ

「ノートに主張がかけた人は持ってきなさい。」

「ノートに引用がかけた人は持ってきなさい。」

と何度も、子どもたちのノートをチェックしていました。

そして、子どもたちのノートに何度も丸つけをしていました。

講話の中で

「授業中に丸をつける。

それだけで子どもたちは嬉しいものです。

高校生でも喜びます。

丸つけをすることが大切です。」

と話していました。

子どもは褒められたいものです。

どんな子供でも同じです。

そこで、「丸」という誰がみても「評価されている」と感じる事ができる印をつけることで、子供たちのやる気も高まります。

②統率

授業の初めに行った名前の確認と持ち物の確認は、子供たちに緊張感をうみます。

「この先生はしっかりやらせる先生だ。」

「この先生の授業は、しっかりと受けなきゃだめだ。」

と思わせることで、子供たちの集中力をあげていたと思います。

学級担任が毎回、このようにやることは無理なのですが、緊張感を持たせる工夫は必要だと感じました。

③確認

目線で確認する。

ノートに丸を付けて確認をする。

子供たちの行動に対して、たくさん確認をしていました。

「こんなに確認されるなんて。手を抜けない」という緊張感を子供たちに生み出したのではないかと感じました。

④目線

常に子供たちを見ていました。

たくさんの子供たちを見ていました。

「この先生は、私のことを見ている」

と、40名近い子供たちがいる教室でも、一人一人が感じたと思います。

それくらい子供たちを見ていました。
講師の先生は板書もしました。
ICTも活用しました。
それでも、子供たちの方を向いている時間が長いと感じました。

⑤褒める

一人一人への褒め言葉。

ノートへの丸つけ。

子供たちのことをたくさん褒めていたと感じました。

笑顔で褒められると、大人でも嬉しいものです。

子供たちも同じです。

授業の中でたくさん褒めることができました。

講話の中で前記5つのベーシックスキルが大切だと話をしていました。
話を聞いている中で、これらを意識するだけで授業は変わると感じました。

(3) 子どもたちの感想

「先生、今日の国語の授業、めっちゃ面白かった。」

「僕たちってこんなできるんだって、自信になった。」

ベーシックスキルを意識した授業を受けた子どもたちは、このような感想を言っていました。

いつもと違う雰囲気で行われた授業です。

教材も資料もいつもの授業とは違います。

毎日の授業でこのような準備をすることはかなり厳しいと思います。

しかし、ベーシックスキルを意識することで、授業の質の向上に繋がると感じました。